

2025 年度 第 1 回教員推薦図書 (2025 年 6 月)

スポーツ科学部 小泉 夏子 先生

◆『推し、燃ゆ』 宇佐見りん著 河出書房新社 2020 年刊行

「推しを推さないあたしはあたしじゃなかった。推しのいない人生は余生だった。」主人公あかりは、アイドルグループ「まざま座」のメンバーである上野真幸を推すことに心血を注ぐ高校生。そんなあかりの推しがある日突然炎上してしまいます。作者の宇佐見りんは、2019 年に小説『かか』でデビューし、大学生の時に本作で芥川賞を受賞しました。心の拠り所を失ってあかりはどの様に生きていくのか。推しがいる人もいない人も、現代社会を生きるみなさんに考えて欲しいテーマが詰まった小説です。

◆『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』

清水晶子、ハン・トンヒョン、飯野由里子著 有斐閣 2022 年刊行

「ポリティカル・コレクトネス」略して「PC」あるいは「ポリコレ」。SNS などでのこの言葉を目にしたことがある人も多いのではないのでしょうか。本書は人文社会系の研究者がポリティカル・コレクトネスの可能性とリスクについて議論を交わし、それぞれの立場から見える社会像とその問題点について考えたものです。ジェンダーとフェミニズム、セクシュアリティとクィア、障害と社会モデル、エスニシティと社会的な望ましさ。差別をめぐる社会の構造を捉えつつ、政治的・社会的「正しさ」とどう向き合うべきかを探求した一冊です。

◆『ファッションの哲学』 井上雅人著 ミネルヴァ書房 2019 年刊行

私たちは毎日服を着ます。何の気なしに選んでいても、それが何かしらの「意見」や「意思」の表明となっているかもしれません。服は「第二の皮膚」や「社会的身体」とも言われるように、社会で他者と関わる時、一番はじめに相手にアプローチする要素です。いわば「私はこのように世界をとらえています」というメッセージ。本書は、身体、メディア、社会の変化、モードの意味、ブランドの意義、貧困と格差、環境への負荷など、様々な視点から「服を着る」ことの本質的な意味を捉えようとする試みです。